

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成21年度)

事業名称	「よみがえる黄金文明～ブルガリアに眠る古代トラキアの秘宝」展
企画(事前)	
目的・内容	<ul style="list-style-type: none"> ・世界最古の黄金文明を築き上げたことで知られるトラキア王国(現ブルガリア)の文化財を、ブルガリアの国立博物館群に収蔵されている高水準の資料群で紹介する。 ・精巧で美的価値の高い金属工芸品を中心に墳墓発掘品を紹介し、親しみながら古代文化への理解を深めていただく。
期待される成果	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史ファンの多い中高年男性および家族連れの来館 ・美術工芸・宝飾品に関心を持つ中高年女性層の来館
指標(数値目標)	観覧者数 50,000人、満足度 70.0%
収支(予算) /観覧者数(見込)	観覧者数 50,000人、歳出 12,750,000円、歳入 9,787,500円、特財率 77.5%
広報戦略	<ul style="list-style-type: none"> ・静岡新聞の紙面とSBSの電波を中心とした広報。本展覧会のターゲットはシニア層と家族連れをメインに想定しているので、新聞等の伝統的メディアが有効と考えられる。 ・ブルガリアのバラから抽出した香りを特殊技術で展示室に展開したり化粧品メーカーの調香師の講演会をおこなうなど、女性層を意識した来館のきっかけ作りをおこなう。

部署	学芸課	記入日	企画 平成21年4月1日
担当者名	村上・泰井		総括 平成21年8月25日
実施日・場所	平成21年4月11日～5月15日 静岡県立美術館第1～6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	有 ・ <input checked="" type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	無し
マスコミ等による共催の有無	<input checked="" type="radio"/> (静岡新聞社・静岡放送) ・ 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> (7館開催の第1会場) ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・墳墓副葬品の金属工芸品などに品質の高い資料を将来することができた。 ・巡回の百貨店等では難しい大空間での照明に気を配った展示を展開することができた。そればかりが理由とは言えないかもしれないが、展示空間の工夫も当館の展示空間に対する満足度の一定部分を担っていると思われる。
アンケートにみる特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・来館者の男女比は当館の平均的構成で、この点では際立った特徴はみられなかった。年齢層のピークは50・60代で、シニア層中心か。 ・同伴者に「配偶者」を挙げた回答が半数を超えており(昨年度なら2番目に相当)、また「子ども」を挙げた回答も多い(回答者全体の15.9%。昨年度であれば2番目に相当)。家族連れでの来館が多かったのではないだろうか。 ・全体的な満足度はリピーター、新規来館者とも90%を超え、高めである。
指標に基づく成果	観覧者数 35,740人(71.5%)、満足度 79.7% 講演会2回実施
研究活動評価委員会からの意見(要約)	なし
収支(決算) /観覧者数(実績)	<ul style="list-style-type: none"> ・観覧者数 35,740人(目標 50,000人: 71.5%) ・歳出 12,750,000円(予算 12,750,000円: 100%) ・歳入 9,896,587円(目標 9,787,500円: 101.1%) ・特財率 77.62%(目標 77.5%)
今後の改善点・課題	<ul style="list-style-type: none"> ・自由記入欄に駐車場への苦情が目立った。スペースの狭小さについてはすぐに改善するのは難しいが、「駐車場警備員の横柄さ」は館のイメージを著しく損なうものであり、早急に改善する必要をみとめる。 ・同じく自由記入欄には本展のような歴史展・文明展への満足や期待を示すものが多かった。また、「東京」や「大都市」でみられるような展示を希求する意見もあった。以上を鑑みるに、夏休み前後に開催されている大規模歴史・文明展については一定の支持が集まっているようであり、魅力的な企画については引き続きリサーチしていく必要があろう。 ・照度が足りない、という指摘も複数あった。工芸品として全体の照度を落としてスポット的に作品を引き立たせようという意図ではあったが、史料として細部までみたいという需要にも一定の配慮していく必要があると感じた。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成21年度)

事業名称	「静岡の美術IX 柳澤紀子」展
企画(事前)	
目的・内容	静岡県出身で全国的、国際的に活躍中の画家、柳澤紀子を紹介。 ロダン彫刻とのコラボレーションも行う。 県出身、ゆかり作家の顕彰と、すぐれた現代美術の紹介。 「身体」をテーマに、ロダン彫刻の再鑑賞の機会を作り、またロダン館を再活性化させる。
期待される成果	現代美術を親しんでもらえる人が増加する。 県出身作家について認識してもらえる人が増加する。 ロダン彫刻を改めて見直す人が増加する。 企画展の入場者で、ロダン館へも入場する人が増加する。
指標(数値目標)	観覧者数 8,000人、満足度 70.0%
収支(予算) /観覧者数(見込)	観覧者数 8,000人、歳出 11,008,000円、歳入 9,591,000円、特財率 87.1%
広報戦略	地元の新聞、テレビに加えて、全国的な広報活動にも力を入れる(「NHK日曜美術館」など)。 全国の美術大学などへの広報に力を入れ、美大生への周知をはかる。

部署	学芸課	記入日	企画 平成21年4月1日
担当者名	堀切		総括 平成21年7月30日
実施日・場所	平成21年5月26日～7月5日 静岡県立美術館第1～5展示室		

学芸員の企画への参加の有無	有 ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	展覧会企画、実施。出品交渉、カタログ論文執筆
マスコミ等による共催の有無	有 ・ 無	巡回の有無	有 ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	初期作品から最新作まで生涯にわたる作品を出品することができ、作家の全貌を紹介することができた。またこの展覧会のために作られた作品や、ロダン彫刻とのコラボレーションなどにより、現役作家ならではの精力的な制作活動を紹介し、現代美術を身近で、今日的なものとして感じてもらえる契機とすることができた。 またギャラリートークやワークショップなど、作家と来館者が触れ合う機会も設けることができた。 NHK「日曜美術館」で5分間放映され、また全国紙などに多く写真入りで取り上げられた。それがロダン館での展示を報道してくれたことにより、ロダン館の全国的な広報に寄与できた。 財団法人地域創造の助成金を取ることもできた。
アンケートにみる特徴	回答率が他の企画展に比べて高く、観覧後に興味をもってくれた来館者が多かったと思われる。 新規来館者が多かったが、これは現代美術展の特徴である。 県出身作家の展覧会であるにもかかわらず、県外からの来館者が多かった。全国的に活動している作家であるため、むしろ県外での知名度のほうが高いのかもしれない。 来館のきっかけを聞く項目では、マスコミの比率が低く、全国紙、NHKなどで取り上げられたことはあまり集客にはつながらなかったと思われる。しかし、「一度来たいと思っていた」の比率は高く、ある程度関心があつた潜在層の来館促進には効果があつたようである。 柳澤作品とロダン彫刻とのコラボレーションに言及している自由回答が多く、その内容もおおむね好意的で、ロダン彫刻およびロダン館の再認識に寄与できた。
指標に基づく成果	観覧者数 6,129人(76.6%)、満足度 63.3% トークショー1回、作家によるギャラリートーク2回、ワークショップ1回
研究活動評価委員会からの意見(要約)	
収支(決算) /観覧者数(実績)	・観覧者数 6,129人(目標 8,000人: 76.6%) ・歳出 9,355,635円(予算 11,008,000円: 85.0%) ・歳入 7,593,400円(目標 9,591,000円: 79.2%) ・特財率 81.2%(目標 87.1%)
今後の改善点・課題	マスコミとの共催をしいな展覧会の広報活動については、妙手を見出すことが難しく、引き続き懸案である。 ロダン館を現存作家に提供して展示することは、作家にとっても、また来館者にとっても好評であった。ロダン彫刻とのコラボレーションは作家の力量や展示デザインが問われるので難しい作業であるが、引き続き可能性を探っていきたい。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成21年度)

事業名称	「ハウル・クレー 東洋への夢」展
企画(事前)	
目的・内容	スイス生まれ、20世紀を代表する画家ハウル・クレーの個展。クレーと日本・東洋との関わりをテーマに、浮世絵から影響を受けたと思われる作品や、東洋関連のクレーの蔵書などを展示することにより、日本では初紹介となるクレーの新たな側面に焦点を当てる。
期待される成果	静岡でのハウル・クレーの個展は、初めての開催となる。クレーのファンのみならず、クレーの知名度を上げる上でも、またとない機会である。20世紀を代表する抽象画家クレーの東洋へのまなざしというテーマの展覧会は、日本では初の試みであり、野心的で学術的な内容である。またこのような性格により、本展は、西洋美術のみならず東洋・日本美術のファン層にもアピールすると考えられる。本展には、当館の所蔵品も出品されている。よって、当館の20世紀西洋美術コレクションを広報する一助ともなる。
指標(数値目標)	観覧者数 30,000人、満足度 70.0%
収支(予算)/観覧者数(見込)	観覧者数 30,000人、歳出 30,686,000円、歳入 21,710,000円、特財率 70.7%
広報戦略	主催者・静岡第一テレビによる特別広報。静岡銀行の協賛。

部署	学芸課	記入日	企画 平成21年4月1日
担当者名	南		総括 平成21年10月19日
実施日・場所	平成21年7月14日～8月30日 静岡県立美術館第1～6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	有 ・ <input checked="" type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	なし
マスコミ等による共催の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 ・ 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 (3館開催の第2会場) ・ 無

総括(事後)	
目的の達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・当館初の画家ハウル・クレーの個展であり、加えて、「クレーと東洋」というテーマに焦点を当てたことにより、当初のコンセプトと内容の実現は達成できた。 ・アンケート結果に見られる「全体的な満足度」は、「はい」(36.7%)「どちらかというはい」(40.1%)を総合すると76.8%になり、西洋美術以外のファン層を広げ、かつ展覧会の魅力をアピールできたと思われる。 ・観覧者総数は19,878人で、目的の3万人を大きく下回った。 ・第一テレビとの共催は、広報面を手厚くサポートしてくれたことにより、成功した。
アンケートにみる特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・回答者の居住地をみると、静岡市内が42.2%で圧倒的な割合を占めているが、県外からの新規来館者が34%を占めるのは注目される。 ・来館回数をみると、「3～5回」(22.2%)、「10回以上」(21.5%)に次いで「初めて」が20.7%と、新規来館者の割合が比較的高い。 ・来館のきっかけは、「テレビ」が17.8%で最も高いのは、第一テレビの広報効果を物語る。次いで高いメディアは「ポスター」で16.1%。メディア以外の「誘われて」来館という回答者が最も大きい割合を占め、25.1%と四分の一の割合である。新規来館者のきっかけは、「美術館HP」が17.7%で健闘している。 ・「全体的な満足度」は、「はい」(36.7%)「どちらかというはい」(40.1%)を総合すると76.8%。新規来館者では87.5%に達している。 ・心地よく鑑賞できたとの回答は79.7%、スタッフ対応の適切さも75%で、高い評価と言えよう。
指標に基づく成果	観覧者数 19,878人(66.3%)、満足度 76.8%
研究活動評価委員会からの意見(要約)	なし
収支(決算)/観覧者数(実績)	<ul style="list-style-type: none"> ・観覧者数 19,878人(目標 30,000人: 66.3%) ・歳出 25,027,422円(予算 30,686,000円: 81.6%) ・歳入 10,127,400円(目標 21,710,000円: 46.6%) ・特財率 40.5%(目標 70.7%)
今後の改善点・課題	予算規模が大きい個展を開催する場合には、世間一般の知名度など、こうしたアンケートを利用して予め認識しておくことが必要と思われる。学芸員の自主企画展の場合には、研究成果の提示などの別目的があるが、本展のような巡回展の場合には、開催した場合のリスクをある程度予測できる対策を講じる方が適切であろう。

■静岡県立美術館 自己点検評価表(展覧会)(平成21年度)

事業名称	「特集 狩野派の世界2009」展
企画(事前)	
目的・内容	静岡県とゆかりが深く、当館で体系的な収集を進めている狩野派の作品について、コレクションを中心として一堂に展示する。あわせて、新発見・近年発見作なども借用して、400年に及ぶ狩野派の絵画についてその流れを概観することにより、当館の特色あるコレクションを広くアピールする。
期待される成果	当館のすぐれた狩野派コレクション、あるいは作品収集の特色について広く認知される。このことは、美術館活動全般への理解を助けるものとなる。また、新発見作などの公開により、学術的な面でも成果が期待できる。
指標(数値目標)	観覧者数 15,000人、満足度 70.0%
収支(予算) /観覧者数(見込)	観覧者数 15,000人、歳出 5,363,000円、歳入 5,894,000円、特財率 109.9%
広報戦略	マスコミの共催がないことは、考えようによってはどのマスコミにも取り上げてもらえるチャンスがあるということであり、話題性のある出品作品を提示して地元メディアや「NHK日曜美術館」などへの働きかけを積極的に展開する。また、県内の学校教諭の協力を得、学生の団体観覧を促す。

部署	学芸課	記入日	企画 平成21年4月1日
担当者名	福士(飯田、石上)		総括 平成21年11月30日
実施日・場所	平成21年9月10日～10月18日 静岡県立美術館第1～6展示室		

学芸員の企画への参加の有無	○ 有 ・ 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	作品調査・選定、出品交渉、カタログ執筆、作品借用
マスコミ等による共催の有無	有 ・ ○ 無	巡回の有無	有 ・ ○ 無

総括(事後)	
目的の達成度	観覧者数は目標には及ばなかったが、古美術の展覧会、それも館蔵品を中心とした展覧会としてはまずまずの集客であった。また、満足度は91パーセント超と高く、この点は十分に目標値を達成することができた。アンケートの自由回答欄にも展覧会の質を評価する内容が多く、高い満足度を得るとともに、当館のコレクションを広く知っていただくという目的はある程度達成されたものと言える。研究者の来館も多く、学術的な面での成果も目標を達成することができた。
アンケートにみる特徴	来館者全体の割合として50歳代の方が多いのは想定通りだったが、新規来館者のうち32パーセントが20歳代であったのは驚きであった。学生の団体観覧が多かったのも一因であろう。また、20パーセント以上の方が県外からの来館であったのは、全国版の新聞・雑誌等への記事掲載が功を奏したものと考えられる。
指標に基づく成果	観覧者数 12,807人(85.4%)、満足度 91.3%
研究活動評価委員会からの意見(要約)	充実した展示内容であり、学術的な貢献度も高い。また、展示・キャプションは観覧者に分かりやすい工夫がされており、評価できる。数年後に再び狩野派展が開催されることを期待する。図録は既刊のものをまとめた改訂版を出すべき。(金原) 館蔵品の充実度を改めて認識させたという意味で、コレクションの活用という点では文句のつけようがない。展示作品の充実度も評価するが、展示に小テーマを設ければメリハリが効いたのではないかと。また、展覧会全体を総括した論文が図録に欲しかった。(榎原)
収支(決算) /観覧者数(実績)	・観覧者数 12,807人(目標 15,000人:85.4%) ・歳出 4,977,812円(予算 5,363,000円:92.8%) ・歳入 5,323,620円(目標 5,894,000円:90.3%) ・特財率 106.9%(目標 109.9%)
今後の改善点・課題	県外への広報は、十分ではないながらも一定の成果をあげているが、県内での広報は、各マスコミを通じて行ったものの単発のため持続的な効果が得にくかった。マスコミと共催しない展覧会でいかに持続的な広報を展開していくかは、「広報費」が確保されない以上大変難しい問題だが、今回来館のきっかけとしてホームページを挙げた方が最も多かったのは、何かのヒントになるかもしれない。